

海外の話題

試練の時を迎えるシンガポールのカジノ

農林中央金庫 シンガポール支店長 和田 透

日本におけるカジノ解禁に関する議論の中で、成功例として紹介されることも多いシンガポールのカジノ。本稿では、そんなシンガポールのカジノ事情を紹介するとともに、最近の状況について報告したい。

シンガポールにおいても、過去、カジノ解禁までには長い間の政治議論が行われ、時に盛り上がりを見せては、「建国の父」と呼ばれるリー・クアンユー元首相をはじめとする有力者に却下されるということが繰り返された。国民的な議論を経て、カジノ合法化が閣議決定されたのは2005年のことである。ようやく認められた背景としては、アジアの他の国際都市との競争が激化する中、シンガポールの経済上または観光上の地位が相対的に低下することに対する懸念が強まっていたことがあげられる。特に、中国をバックに持つマカオのカジノ観光産業拡大は大きな脅威となっていた。シンガポールで10年に2つのカジノが開業して以来、13年にはそれらのカジノ収入が6,000億円程度まで増加しており、マカオ、ラスベガスに次ぐ世界第3位の規模となっている。シンガポールへの観光客数および観光収入も、カジノ開業前の09年にはそれぞれ968万人、126億シンガポールドル（約1兆1千億円）であったのが、13年には1,550万人、235億シンガポールドル（約2兆600億円）まで増加しており、観光振興の面では順調な成果をあげているように見える。

シンガポールのカジノの大きな特徴は、観光や経済の促進を目的として、カジノをそれ以外の施設と組み合わせた統合リゾートの一部として位置づけていることである。

一方の統合リゾートである「マリーナ・ベイ・サンズ」はビジネス街に近く、111千平方メートルの広さを誇る会議場を持つほか、ミュージアムやブランドショップなどを備えている。またもう一方の「リゾート・ワールド・セントーサ」は、レジャー地区として開発されてきたセントーサ島に位置し、テーマパークのユニバーサル・スタジオや世界最大級の水族館に隣接している。

シンガポールのカジノのもうひとつの特徴は、自国民がカジノにのめり込むことのないよう工夫をしていることである。例えば、シンガポール国民または永住権保有者がカジノに入場するためには、24時間の入場で100シンガポールドル（約8,800円）、年間パスで2,000シンガポールドル（約176,000円）を支払う必要がある（外国人は入場無料）。また、国内でのカジノの広告が禁じられているほか、宣伝活動も制限が加えられている。

よって、カジノ収入の多くは、観光客、それも特にギャンブル好きで知られる中国人の観光客によってもたらされている。一昨年まで、中国人の特に富裕層は両リゾートのカジノの上客となって収入の増加に寄与してきた。しかし、中国政府による汚職取り締まり強化や中国の景気減速等の影響を強く受け状況が変わり、シンガポール観光局によると、14年上半期における中国からの旅行客数は前年比30%の減少となったとのことである。その結果、14年7～9月期の「マリーナ・ベイ・サンズ」のカジノ部門収入は前年同期比9%減となり、「リゾート・ワールド・セントーサ」の同部門収入も同21%減となった。足元の中国人富裕層客の減少に加え、他国との競争の面では、フィリピンのカジノリゾートやマカオの新カジノ開業が相次ぎ、更に将来的には日本のカジノ解禁の可能性も強まるなど競争が激しさを増してきており、今まで順調に収入を伸ばしてきたシンガポールのカジノも試練の時を迎えつつある。